【調査報告】

上勝町神田地区における阿波番茶の生産構造

―上勝神田茶生産組合に対するアンケート調査より

佐藤友香

一　はじめに

徳島県で古くから飲まれている阿波番茶(1)は、日本で一般的に飲まれている緑茶の製法とは大きく異なる方法で作られている。阿波番茶は、かつては徳島県南部の山間部―相生町・鷲敷町・上勝町・日和佐町（旧赤河内村）で作られていたが、現在では相生町・上勝町の二町で生産が行われているのみである。

相生町では一九五九年（昭和三四）以降、茶生産の比重を阿波番茶から緑茶へと移してきたため、阿波番茶の生産量は年々減少している(2)。

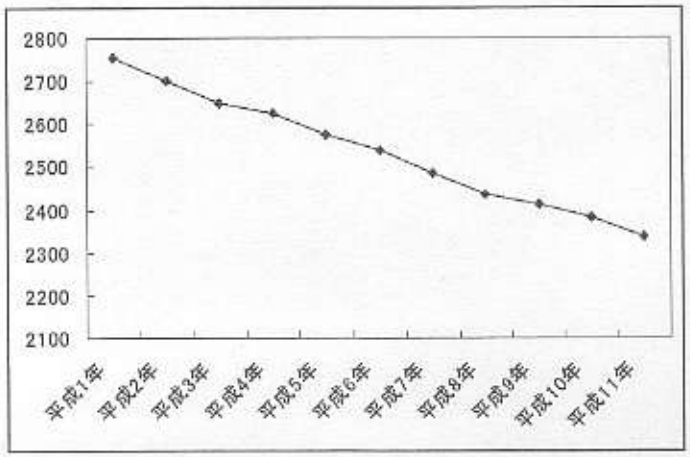

図１　上勝町における人口の変遷

上勝町では定期的な阿波番茶の生産調査が行われていないため、その生産状況については不明な部分が多い。本稿では、上勝町の中でも阿波番茶生産に力を入れている神田（じでん）地区で結成された「上勝神田茶生産組合」における聞き取り調査、および同組合の組合員に対するアンケート調査をもとに、上勝町における阿波番茶の生産構造の一端を明らかにしたい(3)。

上勝町は、徳島県中央部の南東、勝浦郡の南西、勝浦川上流に位置する山間の町である［角川日本地名大辞典編纂委員会　一九八六］。人口は一九九〇年代に入ってから徐々に減少しており（図1）、一九九九年（平成一一）の人口は二三三四人、そのうち六五歳以上人口が四二パーセントと半数近くを占め、高齢化が著しく進んでいることがわかる。就業人口の約四割が第一次産業に従事しており、産業の中心は農林業である。

二　上勝町における阿波番茶生産の歴史

上勝町でいつ頃から茶の生産が始まったかは定かでない。一六八六年（貞享三）の「野尻村検地帳表」によれば、商品作物は総村高の一三パーセントを占めており、その中でも「茶」は一戸平均四一坪と、商品作物の中でも重要な作物であったことがわかる［上勝町誌編纂委員会　一九七九　七三］。

また、近世末には米や麦の本年貢の代わりに藍や茶などの商品作物が指紙で代納されていた。一八二九年（文政一二）の「八重地村中茶御年貢代銀札割符取立及び炭代札割符取立」によれば、八重地村では四三人が茶栽培を行っており、その生産量は二五石五升四合で、中茶は石に付五匁五分懸で賦課されたので、合計三七匁八分七厘が茶年貢で納められたことになる［上勝町誌編纂委員会　一九七九　一〇〇］。幕末・維新期においては生糸と茶は主要輸出品であった。一八七〇年（明治三）の「戸籍下調」によれば、旧福原地区には七三七四坪の茶園があった。

これらの史料に現れた「茶」が、緑茶であるか阿波番茶であるかを即断することはできない。資料の中に「番茶[3]」の名が現れるのは、大正年間（一九一二～一六年）の「統計台帳」以降である［上勝町誌編纂委員会　一九七九　二六五］。『上勝町誌』には福原村における茶の生産量が紹介されているが、たとえば一九一二年（大正元）の煎茶／番茶のそれぞれの生産量・価額・一貫あたりの価格は、一一〇〆・二五三円・二三〇銭／一八一九〆・七二〇・九一円・三九銭となっており、生産量は番茶の方が煎茶を遙かにしのいでいるが、煎茶に比べ番茶の単価は非常に安いことがわかる［上勝町誌編纂委員会　一九七九　二六五］。なお、一九一六年（大正一五）の福原村の農家戸数四七〇戸のうち茶の生産農家は約二六〇戸であり、約五五パーセントの家が茶生産に関わっていたことがわかる。

三　上勝神田茶生産組合について

阿波番茶は上勝町内の各地で生産されているが、神田地区には生産農家が多く、一九九八年（平成九）には地区の名を取った「上勝神田茶生産組合」が結成された。

組合の結成以前は茶の品質・生産時期などがバラバラで、製品にむらが生じていた。神田地区の阿波番茶＝神田茶の知名度を上げ、全国へ製品を発信するためには、組合を作って品質をそろえる必要があった。

組合の主な活動は、①勉強会、②普及活動、③他の生産地への視察である。勉強会は、成立当初は月に一回、現在でも年に五、六回以上行っている。勉強会では、品質向上や広報活動の方針、新製品の開発などが話し合われている。普及活動としては、組合結成当初は、年に二〇ヵ所ほどの県内のイベントに「神田茶」の名前を売り込むために参加。また、不定期で消費者への宣伝や消費者の意見を聞くイベントを開催している。他の地域への視察は、結成当初は盛んに行っていたが、現在は独自性を出すために神田地区内でどうすべきかを考え、取り組んでいる。

組合結成時の組合員数は二二名。現在は高齢等を理由に二名が脱会したため、二〇名（上勝町全体での阿波番茶生産農家数は一六〇戸）で構成されている。生産量は約六トン（上勝町全体での阿波番茶生産料は約二〇トン）、生産高は約二二八〇万円程度である。

流通に関しては、生産者と消費者が直接取引する個別販売が主流で、小口（五〇～一〇〇キログラム）の生産者では約八〇パーセント、大口（一〇〇キログラム以上）の生産者では約五〇パーセントが直接販売で取引きされている。残りは、生産組合を通じて、月ヶ谷温泉保養センターの土産

品販売と組合窓口の中田商店（大字旭中村）へ出荷し、県内外へ販売している。個別取引を行っていたが、高齢や体力的理由で生産をやめてしまった場合、組合の中で対応して、取引を続けているのが現状である。

組合結成当初から積極的に県内外への宣伝活動[8]を行い、二〇〇〇年七月にテレビの情報番組（全国ネット）で「健康茶」として取り上げられたこと、同年、環境庁が認定する「日本の香り風景百選」に選ばれたことなどが影響し、「上勝晩茶[9]」の知名度は上がり、完売するまでになった。特にテレビに取り上げられた直後は、問い合わせが殺到し混乱を引き起こしたというが、現在は落ち着いている。

組合としては、こうした時流を利用しつつ、さらなる品質改良と新製品開発に取り組んでいる。現在は、製茶過程で生じる茶の粉を製品化する試みを行っている。

現在、阿波番茶の生産農家全体が抱えている問題として、生産者の高齢化が挙げられる。阿波番茶生産は、茶摘みや天日乾燥・選別・加工などの行程においてかなりの人手と体力を要する。上勝神田茶生産組合も例外ではなく、組合員の平均年齢は六〇歳を超えており、高齢化は深刻な問題となっている。

四　上勝神田茶生産組合に対するアンケート調査

筆者は二〇〇三年八月、上勝神田茶生産組合の組合員二〇名を対象としたアンケート調査を行った。回答者数は一七名（うち販売代理店が一名）であった。

アンケートでは、

①生産の開始年代
②茶畑面積
③阿波番茶生産時期
④機械の導入時期
⑤販売方法
⑥パートの有無
⑦茶畑・生産量・顧客の増減

を中心に尋ねた。

アンケート結果については、本稿の本文の後、注の前にまとめて表の形で整理して提示した。以下、アンケートの各大項目について、調査の結果明らかになったことをまとめて記す。

①生産の開始年代については、以前使用していた桶に明治一七年と書かれていたため明治初期から生産を行っていたという回答もあったが、親子代々受け継いできたため年代は分からないという回答が多かった。過去の生産記録なども残っておらず、神田における阿波番茶生産の開始時期を特定することはできなかった。

②耕地面積の平均は九・七アールであったが、三〇アールから一アール未満まで生産規模にはかなりの差があり、一〇アールが六戸、一〇アール以下が六戸となっている。生産量も耕地面積と同様、かなりの開きがある。耕地面積に占める阿波番茶の割合を見てみると、五〇パーセント以上を占める農家は少なく、多くの場合稲作とともに行われている。これは、茶の栽培が農家の副業として行われていたことによるものである。

③表6によると茶摘みの時期や漬け込み期間は農家によって大きく違いが見られるが、おおよそ神田地区の茶摘みは七月三日～三〇日に始まっている。茶摘みにかかる日数は一～二〇日と幅が広く、平均で六・六日であ

った。漬け込み期間は平均一七日だが、一週間から一ヵ月と大きく差が見られた。漬け込み期間によって茶の味に違いがでてくる。天日干しは平均二日、一～四日と他の作業と異なり、差はほとんどない。完全に茶葉を乾燥させるため、天気によって天日干しの期間は変わってくるためと思われる。

④阿波番茶の生産過程において導入可能な機械は、揉捻機と回転機である。揉捻機は借用を含めば約六〇パーセントが使用している。導入時期は一九六〇年代に共同購入した例を除けば、一九九〇年代前半に集中している。天日干しする前に固まった茶葉をほぐすために使用する回転機は二戸が使用するのみで共に平成八年に入ってからである。

⑤販売方法は、「直接販売のみ」または「直接販売と生産組合を通しての販売」のみで（表2　販売方法）農協を通じての販売は行われていなかった。生産組合を通しての販売は、販売代理店である中村商店と月ヶ谷温泉での店頭販売に限られていた。

⑥パートの有無に関する質問に対しては、七五パーセントの農家がパートを雇っていると答えている（表1）。パートの大半は五〇代の女性で、多くの場合労働力が最も必要な茶積み期に一人当たり一～九日間雇われていた。一戸の農家のパート人数には大きな差があり、延べ六〇人を雇う農家もあれば、町外に暮らす家族や親戚が茶摘み期に手伝いに来るという農家もあった。また、茶積み期が重なるためにパートを雇いたいが雇うことができないと答えている農家もあった。

⑦茶畑面積は、木の成長や枯れることによる小さな増減が見られるほかは、畑への植栽による増減が見られた。畑への植栽は一九七五年に行った農家が一戸あったが、他は平成に入ってから行われたものであった（表3）。阿波番茶と他の農作物の耕地面積を比較してみると、ほぼ一〇〇パーセントを占める農家もあれば、一〇パーセントにも満たない農家もあり、生産規模に大きな差があることがわかる（図2）。生産量も、天候などによって多少の違いは生じると考えられるが、木の成長や手入れ、植栽などによって「変化なし」または「増加」と回答しており、生産量が減少したという農家はなかった。口コミによる新顧客の増加や、紹介・注文の増加など、全体的に増加傾向にあるといえる。

五　おわりに

今回の調査で、上勝神田茶の生産は、組合の地道な普及活動とメディアによる情報発信の結果、需要の増加を生み、生産量も増加傾向にあることが明らかになった。しかし生産者の平均年齢は六五歳を越えており、現時点で後継者が決まっている農家は一七戸中五戸に過ぎず、七〇パーセントの農家は後継者が決まっていない。阿波番茶の知名度や人気は高まってきているが、生産者の高齢化と後継者不足という問題が深刻化している。今後はこうした「生産者」自体がかかえる問題をクリアしつつ、いかに生産を維持・拡大していくか（製造行程・販売体制・販売ルートの見直し、組合員の連携体制の強化、外部資金の導入、地域外人員の導入、新製品の開発、対外ＰＲなどを含め）が、阿波番茶生産の、そして組合の大きな課題となってくるものと思われる。

上勝神田茶生産組合に対するアンケート 結果

表1 上勝町における神田茶生産組合アンケート結果 ①

農家番号	家族人数	跡継ぎ	パート		生産開始時期	耕地面積(㎡)			
		いる/いない	親族	その他		阿波番茶	稲	ゆこう	その他
1	2	いない	—	1	—	120	2000	200	–
2	3	いない	—	3	—	500	1000	1000	–
3	3	いない	—	10	—	200	2000	–	–
4	4	いる	1	60	—	2000	3000	–	–
5	4	いない	—	10	昭和30年ごろ	300	1600	–	100
6	2	いない	—	—	—	1000	3000	–	1000
7	4	—			明治時代から	300	–	–	–
8	2	いる	不明	不明	—	1000	250	1000	–
9	1	いない	2	1	3代前	10	2000	–	–
10	3	いる	不明	不明	–	–	–	–	–
11	3	いる	1	5	明治時代から	3000	–	–	–
12	3	いない	–	2	昭和2, 3年頃	600	3500	–	300
13	4	いない	不明	不明	–	1000	1500	–	–
14	2	いない	–	–	昭和初期	2000	3000	1000	–
15	1	いない	–	–	–	1500	700	–	
16	6	いる	1	2	大正時代	1000	400000	–	5000

表2 上勝町における神田茶生産組合アンケート結果 ②

農家番号	生産量(kg)				機械の導入時期		販売方法	
	阿波番茶	稲	ゆこう	その他	揉捻機	回転機	直販	生産組合
1	120	750	300	–	–	2002	○	–
2	–	–	–	–	–	–	○	–
3	60	900	–	–	–	–	○	○
4	480	1350	–	5000	–	2001	○	○
5	–	100	–	–	2000(S30協同購入)		○	○
6	–	–	–	–	1988	–	○	○
7	–	–	–	–	1993	–	○	○
8	–	–	–	–	–	–	○	–
9	–	990	–	–	(借用)	–	○	○
10	–	–	–	–	–	–	○	–
11	–	–	–	–	昭和年代	–	○	○
12	–	–	–	–	1991	–	○	○
13	–	450	–	–		–	○	○
14	–	1260	500	–	(借用)	–	○	○
15	630	350	–	–	1998	–	○	○
16	–	1500	–	2000	1993	–	○	○

表3 上勝町における神田茶生産組合アンケート結果 ③

農家番号	茶畑面積の変化	生産量の変化	移動年代	販売先の変化	新しい販売先
1	変化なし	植栽により増加	―	変化なし	―
2	変化なし	変化なし	―	変化なし	―
3	変化なし	変化なし	―	変化なし	―
4	変化なし	木が成長したため増加	1990年	増加	口コミによる新顧客
5	変化なし	手入れのため増加	―	変化なし	
6	木の成長により増加	年によって異なる	―	変化なし	―
7	変化なし	変化なし	―	―	―
8	増加	増加	1996年	増加	―
9	変化なし	変化なし	―	増加	販売先からの紹介
10	2・3本が枯れ減少	変化なし	―	変化なし	
11	畑に植栽し増加	木が成長したため	―	増加	得意先からの注文増加
12	変化なし	変化なし	―	変化なし	
13	変化なし	変化なし	―	―	―
14	畑に植栽し増加	木の成長により増加	1975年	変化なし	―
15	変化なし	変化なし	―	変化なし	―
16	新植のため増加	新植のため増加	1993年	増加	消費者の増加

表4 上勝町における神田茶生産組合アンケート結果 ④

農家番号	阿波番茶生産における問題点	備考
1	茶摘時における人手不足	作業内容がきつい、品質に格差がある
2	―	―
3	高齢化により作業労働が苦しくなってきた、後継者不足	―
4		「神田茶」としてのブランドとして品質保持・向上を図りたい。旧式農具あり
5	茶摘時における人手不足	
6	茶摘時における人手不足	―
7	―	―
8	品質の不均等	―
9	後継者がいない	―
10	品質への苦情がきた	―
11	茶摘時における人手不足	―
12	人気上昇中なのに農家が高齢化している	―
13	―	―
14	茶摘時における人手不足	―
15	茶摘時における人手不足	―
16	茶摘時における人手不足	昭和15年頃の文部省の小学校の教科書に神田茶が旭の名産物として載っていた

表5 上勝町における神田茶生産組合アンケート結果（個人表）

No	農家番号	性別	年齢	職業	阿波晩茶とのかかわり	現住所
1	1	男	57	会社員	全工程	上勝町
2	1	女	78	無職	全工程	上勝町
3	1	女	50	パート(26日)	茶摘時	−
4	2	男	56	会社員	全工程	上勝町
5	2	女	52	無職	全工程	上勝町
6	2	女	82	無職	−	上勝町
7	2	女	50	パート(1日)	茶摘時	−
8	2	女	52	パート(2日)	茶摘時	−
9	2	男	58	パート(3日)	茶摘時	−
10	3	男	−	−	全工程	上勝町
11	3	男	47	大工	茶摘のみ	小松島市
12	3	女	50	会社員	茶摘のみ	徳島市
13	3	女	44	会社員	茶摘のみ	徳島市
14	3	女×10	50〜70	パート(2日)	茶摘時	−
15	4	男	53	農業	全工程	上勝町
16	4	女	50	農業	全工程	上勝町
17	4	男	−	−	茶摘のみ	上勝町
18	4	女	−	−	茶摘のみ	上勝町
19	4	男(伯父)	70	手伝い(5日)	茶摘・茶すり	−
20	4	女×60	40〜70	パート(述べ60日)	全工程	−
21	5	男	−	−	全工程	上勝町
22	5	女	−	−	全工程	上勝町
23	5	男	45	大工	茶すりのみ	徳島市
24	5	女	44	主婦	日干しのみ(10日)	徳島市
25	5	女×10	60〜70	パート(2日)	茶摘時	−
26	6	男	68	農業	全工程	上勝町
27	6	女	65	農業	全工程	上勝町
28	7	男	78	農業	全工程	上勝町
29	7	女	74	主婦	全工程	上勝町
30	7	男	51	会社員	茶摘のみ	上勝町
31	7	女	48	家事	茶摘のみ	徳島市
32	7	女	45〜56	パート(2日)	茶摘時	−
33	8	男	−	−	全工程	上勝町
34	8	女	−	−	全工程	上勝町
35	8	男	50	会社員	茶摘のみ	小松島市
36	8	女	52	会社員	茶摘のみ	小松島市
37	9	−	−	−	全工程	上勝町
38	9	女(妹)	66	パート(2日・7日)	茶摘のみ・天日干し	−
39	9	女×7	70前後	パート(2日)	茶摘時	−
40	10	男	53	ブロイラー	−	−
41	10	女	54	農業	−	−
42	10	男	−	−	−	−
43	11	男	72	−	−	−
44	11	女	64	−	−	−
45	11	男	39	−	−	−
46	11	女(兄弟)	70	パート(7日)	茶摘時	−
47	11	女(友達)	60	パート(5日)	茶摘時	−
48	11	女(近所)	40〜70	パート(2〜9日)	茶摘時	−
49	12	男	70	−	全工程	上勝町
50	12	女	67	−	全工程	上勝町
51	12	女	83	−	全工程	上勝町
52	12	男	45	パート(2日・2日)	茶摘時・天日干し	−
53	13	男	−	−	−	−
54	13	女	−	−	−	−
55	13	男	35	会社員	茶摘のみ	神戸市
56	13	男	30	会社員	茶摘のみ	由岐町
57	13	男	28	会社員	茶摘のみ	徳島市
58	14	男	71	農業	全工程	上勝町
59	14	女	65	農業	全工程	上勝町
60	15	男	66	−	全工程	上勝町
61	16	女	96	−	−	上勝町
62	16	男	73	農業	全工程	上勝町
63	16	女	67	農業	全工程	上勝町
64	16	女	40	会社員	茶摘のみ	上勝町
65	16	女	19	学生	−	上勝町
66	16	男	18	会社員	−	上勝町
67	16	女(親戚)	60	パート(10日・7日)	茶摘時・天日干し	−
68	16	女	50〜70	パート(10日・8日)	茶摘時・天日干し	−
69	16	男	60	パート(10日・9日)	茶摘時・天日干し	−

表6　茶摘み期間

農家番号	茶摘	ゆでる(殺青)	揉捻	漬け込み	桶出し	天日乾燥
1	7月17日～18日	7月19日	7月19日	7月19日	7月31日	7月31日～8月3日
2	7月19日	7月20日	7月20日	7月20日	8月19日	8月19日～8月21日
3	7月19日～20日	7月21日	7月21日	7月21日	8月4日	8月4日～6日
4	7月16日～21日	7月17日～20日	7月17日～20日	7月17日	9月3日	7月27日～9月5日
5	7月13日～20日	7月15日	7月15日	7月15日	順に2週間くらい	8月1日(1桶につき3日)
6	7月18日～8月5日	3日摘み1回ゆでる		15日間		3日間
7	7月12日～13日	7月14日	7月14日	7月14日	8月5日～8月15日	8月5日～8月15日
8	7月7日	7月9日	7月9日	―	―	―
9	7月22日～23日	7月24日	7月24日	8月17日	8月17日～28日	8月17日～28日
10	7月30日～8月2日	7月30日から順次			8月22日	8月22日～23日
11	7月12日～21日	3回に分けて		今年は天候不良により20日間		―
12	7月8日～20日	7月13日～23日	7月13日～23日	10日間		7月25日～8月5日
13	7月20日～23日	7月24日	7月24日	7月24日	8月3日	8月3日～5日
14	7月7日～21日	7月10日～22日	7月10日～22日	7月10日～8月20日	8月20日～8月27日	8月20日～8月27日
15	7月3日～23日	―	―	―	―	―
16	7月10日～15日	7月14日	7月14日	7月14日～15日	7月28日	7月28日

注

（1）阿波番茶の製造工程は以下の通りである。

①茶摘み：七月中旬に成長した葉を全て摘み取る。

②殺青：茶葉を煮る。

③揉捻：揉捻機または舟形の手動茶摺り機で揉捻する。

④桶漬け：重石を置き、空気を完全に遮断するために煮汁を注ぎ、茶葉を桶に漬け込む。

⑤日干し：二週間ほど漬け込んでから、桶から取り出し二日間天日干しする。

（2）相生町役場による調査では、二〇〇二年（平成一四）の相生町における阿波番茶の生産量は一六トンであった。

（3）神田は上勝町の一地区であり、今回の調査では、上勝町における阿波番茶生産の全体像を把握するに至っていないことはあらためてお断りしておく。上勝町全体の阿波番茶生産の実態の把握については今後の課題としたい。

（4）ただし、一般の番茶と阿波番茶の割合は不明である。

（5）一九九七年（平成一一）、月ヶ谷温泉・近鉄百貨店（大阪）にて消費宣伝のイベントを開催。また、二〇〇三年には上勝町旭の千年の森ふれあい館にて品質改良を目的とした「香りの風風物詩　上勝番茶展」を開催した。

（6）一般にバンチャは「番茶」と表記するが、上勝町では、通常の番茶と差異化を図るため、あえて「晩茶」と表記している。

参考文献

岡田早苗・尾崎道雄　一九八三　「微生物による日本の発酵茶、阿波番茶・碁石茶・黒茶の調査」　『農業集報』二七―二　二六八～二七六

角川日本地名大辞典編纂委員会　一九八六　『角川日本地名大辞典　三六　徳島県』　角川書店

上勝町誌編纂委員会編　一九七九　『上勝町誌』　上勝町誌編纂委員会

中村羊一朗　一九九八　『番茶と日本人』　吉川弘文館

橋本実編　二〇〇二　『お茶の謎を探る』　悠飛社

羽山久男　一九八一　『山間地域の史的展開―徳島県勝浦郡上勝町』　教育出版センター

松下智　一九九三　『ティーロード―日本茶の来た道』　雄山閣出版

松下智　一九九九　『幻のヤマチャ紀行―日本茶のルーツを探る』　淡交社

松下智　二〇〇二　『ヤマチャの研究』　岩田書院

宮川金次郎　一九九四　『日本の後発酵茶―中国東南アジアとの関係』　さんえい出版

宮川金次郎・大坪藤代・片淵きようこ　一九八九　「日本の後発酵茶」　『日本家政学会報』四〇―六　五四五～五五一

南廣子　一九七五　「地域茶の研究（一）　徳島県丹生谷地方の阿波番茶について」　『名古屋女子大学紀要』二一　五一～五七

守屋毅　一九八〇　『お茶の来た道』　日本放送出版協会

山内賀和太　一九八〇　『阿波の茶』　徳島県那賀郡相生町役場

上勝町役場ホームページ　http://www.kamikatsu.jp/

統計局ホームページ　http://www.stat.go.jp/

（〒七七〇―八〇八二　徳島市八万町川南八五―一五）